千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第5号　一～一〇（二〇〇九）
研究論文

『源氏物語』竹河巻冒頭表現考

――切り捨てられる玉鬘一家と形骸化する光源氏の意志――

髙野　浩

一、はじめに

竹河巻は『源氏物語』中において、とりわけ解釈上の問題点が多い巻の一つである。敬語表現にばらつきが見られたり、作中人物の官職名や昇進記事が他巻と食い違いを見せたりするなど、これまで様々な問題点が指摘されてきた。[1] そうした中で、古くは作者別人説が説かれもするなど、きわめて特異な巻として知られる。さらには、竹河巻の直前の二帖、匂兵部卿と紅梅の両巻とともに匂宮三帖として括られ、作品全体の中における位置づけについても論じられてきた。そうした巻の内外に渡る問題点と関わりつつ、もっとも注目されてきたのは次に引く巻冒頭の表現である。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。　（竹河、五九）[2]

この冒頭部分は、この巻の語り手「悪御達」よりも高次に位置すると考えられる人物の言葉である。それによれば、この竹河巻でこれ以降展開される語りは「大殿わたりにありける悪御達」によるもので、その語られた内容は「紫のゆかり」[3]の語った内容とは異なっているのだとする。この内容が異なることについて、「悪御達」は「紫のゆかり」側に「ひが事」すなわち錯誤があるのだとしている。高次に位置する語り手は、いずれの言い分が正しいのかということについて判断を保留し、そのまま「悪御達」の「問はず語り」に物語は移行していく。

この「ひが事」とはいったい何を意味するのかということが、これまで大きな問題として扱われてきた。しかし、それが具体的に何を指し示しているのか、いまだ判然とはしていない。だが、この「ひが事」の意味を考えることは、竹河巻を理解・把握する際に見過ごすことができない事柄である。本稿ではこの点にも留意しつつ、巻の冒頭叙述、および竹河巻そのものの解釈を試みてみたい。

二、「源氏の御族にも離れたまへりし後の大殿わたり」

「源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは」と始まる序文は、これから展開される物語の語り手、すなわち「悪御達」が何者であるのかをまず最初に示す。と同時に、「源氏の御族」と「後大殿わたり」がいかような関係にあるのかということも明るみにしている。この巻頭を飾る表現において、すでに解釈の揺れが生じている。この箇所における主要な問題は、「後大殿わたり」が誰を意識した表現なのか、ということである。たとえば、「後大殿わたり」について、『花鳥余情』は「のちのおほいとのはひけくろ」[4]とし、「玉かつらのないしのかみの源氏の御子にあらさるゆえ」と解釈している。その一方で、『細流抄』は、『花鳥余情』説を否定した上で、「ひけくろを云にあらす玉かつらをいへり」[5]として、鬚黒ではなく光源氏の猶子である玉鬘が想定されているのだと読み取っている。このような把握のズレや認識の違いは現代にいたるまで見られる。こうした解釈の揺れについて、神野藤昭夫氏は古注を軸に整理・概観している。[6]氏の整理に基づき、「後大殿わたり」の諸解釈についてまとめてみると次のようになる。

①鬚黒のことをさす。その理由は、玉鬘は源氏の実子ではないから。（『花鳥余情』『源氏不審抄出』）

②玉鬘のことをさす。その理由は、玉鬘は鬚黒の室となり、源氏の実子ではないから。（『弄花抄』『細流抄』『明星抄』『万水一露』）

③鬚黒のことをさす。玉鬘は源氏の子孫と関係が深いのだから、理由を玉鬘に求める必要はない。（『箋』『源氏物語聞書』『孟津抄』）

④玉鬘を念頭に置いた表現である。源氏・致仕大臣の子孫の語りに続く語りとして理解すべきだから。（『新釈』）

⑤鬚黒のことをさす。源氏の子孫たちのことを語った匂兵部卿巻と対比させられているから。（『玉の小櫛』）

⑥鬚黒・玉鬘が源氏一族から離れていったということ。（森一郎氏説）

こうした複数の見解を踏まえた上で、現在の一般的解釈は、後の太政大臣邸、つまり「玉鬘を含んだ鬚黒家」としてこの箇所を把握しているようだ。具体的個人の問題として取り扱うのではなく、家の単位でとらえていく解釈である。『細流抄』は玉鬘のことをさす理由として「ひけ黒の室なれはひけくろのあたり（ママ）とかけり」と指摘している。『細流抄』の結論は玉鬘に限定したものになってはいるが、「あたり（ママ）」という語に着目している点は注目すべきだろう。「後大殿」の後に「わたり」という語が接続していることから、鬚黒、玉鬘のいずれかに限定しない家単位での理解が穏当とみられる。⑥の森一郎氏の見解も、鬚黒・玉鬘をセットで取り扱う点で、同様のものとして理解される。ただし、森氏の見解の独自性はこの直前にあらわれる「離れたまへりし」という箇所の解釈にあった。

「離れ給へりし」という一句は、もと関係があったればこそ用いられ得るであろう。それが関係をなくしたことが、この一句によって分るのである。すなわち、この一句によって、読者は、過去において鬚黒が源氏一門と関係をなくしたことのあった事を知る。[7]

この「離れたまへりし」という箇所については、「縁遠い」と表現するなど、血縁関係上の距離があるととらえるのが、一般的な解釈である。それに対して、森氏の説は、この箇所から「過去において鬚黒が源氏一門と関係をなくしたことのあった事」を想定し、親疎関係の問題としてとらえている。それを森氏は「疎隔」と表現している。たしかに、血縁関係上の距離としてこの一節をとらえていくと、玉鬘が光源氏の養女であったという事実が、相当に軽いものとして扱われる

ことになり、見方によっては玉鬘と光源氏の関係は無視されているとさえ言いうる。一方、森氏の「疎隔」という解釈によるならば、源氏一門と鬚黒との間に政治的問題が生じたことでの乖離ということになり、光源氏の養女としての立場を、かつて玉鬘は承認・保障されていたことが十分に想起できることになる。このことは、次に引用する竹河巻の一節とも呼応するものであろう。

六条院には、すべて、なほ、昔に変らず数まへきこえたまひて、亡せたまひなむ後のことども書きおきたまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪れきこえたまふ。

（竹河、六〇）

光源氏が自身の死後にまで目配りをし、相続などについても済ませていたことは匂兵部卿巻にもみられることだが、玉鬘もその対象範囲に入っていたこと、厚遇すべき存在としてみなされていたことがここで明らかにされる。このことに鑑みると、養女という玉鬘の属性は第三部に入ってからも意識されているのであって、それを無視し、血縁関係上の距離として「離れたまへりし」という一節を理解することには問題があるだろう。このことは、光源氏の他の子どもたちとの比較においても同様の結論が導き出せるだろう。匂兵部卿巻の冒頭の一節を引く。

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。遜位の帝をかけたてまつらんはかたじけなし、当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとりどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

（匂兵部卿、一七）

ここには、匂宮と「同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君」とあるように、薫について語られている箇所がある。光源氏の実子でありながらも表向きは光源氏の異母兄弟とみなされる冷泉院や光源氏の孫にあたる匂宮と並んで、柏木の子でありながら光源氏の実子として扱われる薫が、光源氏死後の世界において、その後継者候補といった趣で数え上げられている。もちろん、物語世界内において薫は、光源氏の遺児として認識されているのであるから、候補の一人に数え上げられること自体に無理はない。しかしそれならば、薫と同様に血がつながってはいない玉鬘においても、光源氏の養女としてみなされていたという事実は消し去り難いものであるはずである。そのうえ、光源氏による玉鬘厚遇意識を追認する以上、血縁的な問題のみを取り上げ、一族の範疇から外れた存在として把握することには少なからぬ無理が生じる。

加えて、この問題についてもう一点述べておくと、「源氏の御族にも離れたまひし」という表現における助詞「も」の存在について考える必要があるだろう。この「も」からは、「源氏の御族」以外の存在があったことが窺い知れる。それは、当代の権勢家として夕霧に次ぐ立場にあった紅梅大納言の一族を指し示すものと解してよいだろう。助詞「も」の存在から、紅梅大納言家が想起されてくる場合、大納言は玉鬘の異母弟にあたることから、「離れたまへりし」を血縁関係上の問題としてとらえることは難しくなる。こうした点からも、血縁関係上の問題として「離れたまへりし」の一節を理解するのではなく、森氏の見解をふまえつつ、心理的な距離が徐々に広がったというように解し、鬚黒・玉鬘一家は紅梅大納言家との乖離に続き六条院一族とも疎遠になった、というような状況を想定すべきであろう。

三、「疎隔」の時期

鬚黒・玉鬘一家が周囲との関係を悪化させ、孤立していく様子が窺い知れる表現が巻の冒頭に掲げられているわけだが、それでは、六条院一族との乖離の時期はいつ頃になるのであろうか。この点について森氏は、御法巻以前に遡ると推測している。御法巻で危篤状態に陥った紫の上のもとに玉鬘が見舞いにさえ訪れていないことへの不自然さを主たる要因とし、政治を語らない『源氏物語』の特性による暗示的な手法に理由づける見解である。[8] しかし、竹河巻頭の序文で示される乖離は光源氏個人とのものではないこと、出家にあたり光源氏が玉鬘のことを気にかけていたという記述のあることを神野藤氏はふまえ、森氏の説の問題点を指摘している。[9] 仮に、乖離が光源氏と鬚黒の間で生じたものと考えるにしても、玉鬘と鬚黒の結婚後には、両者がそれなりの友好的関係で結ばれていたことが示される正編世界と、さきに見た光源氏による玉鬘厚遇を記す遺書の存在との対応関係において、御法巻以前に不和が生じたと考えるのは難しいだろう。

しかし、鬚黒の性格や人付き合いの面での欠点についての記述はたしかに本文中にみられる。

尚侍の君の御近きゆかり、そこらこそは世にひろごりたまへど、なかなかやむごとなき御仲らひのもとよりも親しからざりしに、故殿情すこしおくれ、むらむらしさ過ぎたまへりける御本性にて、心おかれたまふこともありけるゆかりにや、誰にもえなつかしく聞こえたまはず。　（竹河、六〇）

周囲との折り合いを欠く性格が、玉鬘の交友関係にも影響を及ぼしたことが記されている。だが、同じ竹河巻内において玉鬘は、娘の大君を皇族に娶せたいという鬚黒の遺志を尊重しようとし、鬚黒を非難するような言動を見出すことはできない。それどころか、玉鬘は光源氏を追懐すると同時に、鬚黒を追慕してさえいる。[10] 光源氏と鬚黒の間に何らかの不和が生じていたとすれば、玉鬘のありようもまた異なったものになるのではないか。そのように考えてみると、鬚黒の性格によってもたらされた弊害とは、おそらく夕霧家や紅梅大納言家などをはじめとする貴族たちとの関係の希薄さを指すのであろう。「年ごろさもあらざりしに、この御事ゆえしげう聞こえ通ひたまへるを、またかき絶えんもうたてあれば」、「北の方は故大臣の御むすめ、真木柱の姫君なれば、いづ方につけても睦ましう聞こえ通ひたまふべけれど、さしもあらず」（竹河、八八～八九）といった疎遠になった状況を示す記述は、単に彼らとの交流が薄いといった程度の親疎関係を意味し、一族意識や家の問題にかかわるような重い意味での親疎関係を指すものではないとみられる。

この鬚黒の性格についての語りの直後には、さきに引用した光源氏による玉鬘厚遇の話題が続く。光源氏が明石・秋好の両中宮に次いで玉鬘を重んじたことに発し、夕霧がその意を継いで玉鬘邸にも折にふれて訪れたという。夕霧が光源氏の意思を尊重し、玉鬘には格別の配慮をしていたというこの叙述において注意すべきは、少なくともこのタイミングにおいては夕霧と玉鬘の間に大きな不和は生じていないということである。つまり、六条院一族との決定的な乖離は、光源氏が死を意識し、遺言を残した時点では考えにくいのである。そうした点から、序文でいうところの六条院一族との乖離の時期もまた別にあると考えねばならない。

そこで、あらためて六条院一族と鬚黒・玉鬘家の乖離の時期を検討する必要が生じてくるが、もっとも妥当な解釈は、竹河巻内でそれが進行していくのではないかというものである。竹河巻は、周知のごとく、玉鬘一家の没落の様相が描かれる巻であるが、そのこと自体が六条院一族との乖離と連動しているのではないだろうか。高次の語り手

による冒頭の序文に続いて、悪御達による光源氏の遺志とそれを遵守しようとする夕霧の姿が描かれるが、その連続する異なる立場からの語りの内容には、明らかにズレや懸隔が見出せるだろう。玉鬘家の没落について、序文は結論を示し、悪御達の語りの冒頭はいまだ深刻な不和の生じていない段階から語り起こされているとみなすことができる。

序文と、それ以降に続く悪御達の「問はず語り」の時間の問題について、星山健氏は次のように述べる。

> 「悪御達」に対する「落ちとまり残れる」という表現からもうかがえるように、彼女の「問はず語り」は、例えば「冷泉院も薫も玉鬘もみな亡くなって、この世にいない」ような時点、少なくとも作中世界からは大きく時間の下った時点においてなされたものとして設定されているようである。そのような時点でならば、本来六条院とは遠いところにいたはずの「悪御達」の耳にまで、「紫のゆかり」の詳細な内容が届いていたとしても、取り立てて矛盾は生じないはずである。(11)

「彼女」すなわち悪御達の「問はず語り」は、作中世界の時間よりもかなり隔たった時点でのものであることを述べている。作中人物がすべて世を去っているかどうかまでは判定しがたいが、必ずしも竹河巻以前に「離れたまへりし」という状況が発生している必要性はないことは考えうるだろう。当然のことではあるが、乖離を認めることができる時間の範囲は、序文の語りよりも前であればよいわけである。竹河巻の序文は、それ以降に続くのが悪御達の「問はず語り」であることを述べ、それをある時間軸の中に位置付けつつ、時間が遡行し、過去の物語が新たに語りだされる構成を明確にする仕掛けともいえるのではないだろうか。

四、「ひが事」解釈の問題

竹河巻内で六条院一族との「離れ」、すなわち乖離が進行していくのだとするとき、それが「ひが事」と絡み合う余地はあるのだろうか。「ひが事」がいったい何を指し示すものであるのか、ということについては、古注以来いくつかの内容が考えられてきた。

たとえば、『花鳥余情』にみられるがごとく、匂兵部卿巻とのかかわりから、冷泉院や薫の出生の紛れにかかわるものとする考え方がある。それぞれ、表向きの系譜とは異なって、実際は光源氏、あるいは柏木の子であるが、それを知らない悪御達にとっては、いい加減な話でしかなく、「ひが事」にあたるというものである。

しかし、それが冷泉院の出生問題だとすると、冷泉院の出生経緯を否定することになるが、その据え直しはなされておらず、また「ひが事」自体は「源氏の御末々」にあるわけだから、源氏の子孫の範疇に組み込まれないとされた冷泉院が、悪御達の発話の中で「源氏の御末々」に組み込まれることになり、矛盾をきたす。また、薫の出生問題だとしても、悪御達が薫をある意味では擁護するような形をとる必然性はないはずである。(12)『花鳥余情』はさらに、「又玉かつらの君は致仕のおとゝの御むすめなれとゆふかほのうへの事によりて源氏の御子のつらにあつかひ給へり」と、玉鬘が光源氏の実子ではないことの問題が想起されるような指摘を載せている。しかし、玉鬘が源氏の実子に限りなく近い猶子であったことは、正編の物語世界においても明白であり、直接的にそれを認めない記述が竹河巻以前にあるわけでもないことから、「ひが事」というに足るほどのものではない。

いずれの説もいまひとつ決定打に欠けることは否めないだろう。そうした意味では、結局のところ「ひが事」の意味はわからないとする論者が出てくるのも道理であり、事実そのように保留にする解釈も近年ではみられる。そうした中で、あらためてこの問題を検討する際に

指針となりうるのは、序文で対比的な扱いをなされた「紫のゆかり」の述べた内容、つまり匂兵部卿巻の内容である。以降、匂兵部卿巻を参照しながら、六条院一族と玉鬘家が乖離していくさまを検討しつつ、それが「ひが事」と有機的に結びつくような場所を見定めてみたい。

五、源氏一族と玉鬘の乖離

匂兵部卿巻は、光源氏死後の世界の有り様を描き、光源氏類縁の者たちのその後について語られている。

さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき住み処どもにみなおのおの移ろひたまひしに、花散里と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける。入道の宮は、三条宮におはします。今后は内裏にのみさぶらひたまへば、院の内さびしく人少なになりにけるを、右大臣、「人の上にて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限りの世に、心をとどめて造り占めたる人の家居のなごりなくうち棄てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれに、はかなさ知らるるを、わが世にあらん限りだに、この院荒らさず、ほとりの大路など人影離れはつまじう」と思しのたまはせて、丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の据えのためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。大殿は、いづ方の御事をも、昔の御心おきてのままに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつりたまふにも、対の上のかやうにてとまりたまへらましかば、いかばかり心を尽くして仕うまつり見えたてまつらまし、つひに、いささかも、とりわきてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ。天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。まして殿の内の人々、御方々、宮たちなどはさらにも聞こえず、限りなき御事をばさるものにて、またかの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。春の花の盛りは、げに長からぬにしも、おぼえまさるものとなん。

（匂兵部卿、一九～二一）

ここでは、夕霧による六条院縁故者への配慮、後見があったことが記されている。続編に登場してくる光源氏を取り巻く主だった面々はいずれも取り上げられているのだが、玉鬘についてだけは一切ふれられていない。それは、ここに引用した箇所のみならず、匂兵部卿巻全体を通してみられる現象である。ところが、さきに確認したとおり、竹河巻は光源氏が玉鬘を二人の中宮の次に厚遇すべき者として位置づける遺書について記していた。この遺書の存在を考えると、少なくとも光源氏自身は、一族の扱いをなすべき対象として玉鬘をとらえていたことが窺える。さらに、そのことは夕霧を中心とした人々の間に伝えられていた。それゆえに、この匂兵部卿巻において玉鬘に関する話題がまったく見られないことには、少なからず疑問が残る。たしかに、引用箇所は、「さまざま集ひたまへりし御方々」という前置きで始まるため、六条院に住まわなくなった玉鬘への言及がないことは当然ではある。しかし、匂兵部卿巻において、傍線部「大殿は、いづ方の御事をも、昔の御心おきてのままに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつりたまふ」とあるように光源氏の遺志を汲み取ろうとする夕霧が語られたのち、竹河巻において新たに光源氏の遺言があったことがあらたに明らかになっている。つまり、匂兵部卿巻において玉鬘

を語ることが欠落していたことがわかる仕組みになっているのである。

匂兵部卿巻の語りは、夕霧に対して好意的だ。破線部「対の上のかやうにてとまりたまへらましかば」で始まる一文からは夕霧の紫の上思慕までもが語られているが、これは一面的には紫の上賛美としても受け取れ、そうした態度を示す夕霧の側に立った内容が「紫のゆかり」によって選び取られ、語られているのかもしれない。直前の光源氏の遺志を汲み取ろうとする箇所や光源氏が築いた邸宅維持を志しているとされる叙述によって立ち上がってくる孝行息子としての夕霧像は、「紫のゆかり」によって作られたものとも考えうる。

一方、竹河巻における夕霧と玉鬘の関係に目を移すとどうであろうか。

右の大殿の蔵人少将とかいひしは、三条殿の御腹にて、兄君たちよりもひき越しいみじうかしづきたまひ、人柄もをかしかりし君、いとねむごろに申したまふ。いづ方につけてももて離れたまふ。女房にもけ近く馴れ寄りつつ、思ふことを語らふにもたよりありて、夜昼、あたり去らぬ耳かしがましさを、うるさきものの心苦しきに、尚侍の殿も思したり。母北の方の御文もしばしば奉りたまひて、「いと軽びたるほどにはべるめれど、思しゆるす方もや」となむ大臣も聞こえたまひける。（竹河、六二～六三）

正月の朔日ごろ、尚侍の君の御はらからの大納言、高砂うたひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、真木柱のひとつ腹など参りたまへり。右大臣も、御子ども六人ながら引き連れておはしたり。御容貌よりはじめて、飽かぬことなく見ゆる人の御ありさまおぼえなり。君たちも、さまざまいときよげにて、年のほどよりは官位過ぎつつ、何ごとを思ふらんと見えたるべし。（竹河、六五）

当初は、息子蔵人少将の大君思慕があったこともあり、夕霧たちはそれなりに玉鬘との交流をはかる。蔵人少将と大君の結婚の承諾を得るために雲居雁もしばしばやり取りを行っており、夕霧自身からの打診もあった。そして、新年には子どもたちを引き連れて玉鬘邸を訪問している。夕霧と玉鬘家の関係は、目立った交流はそれまでにはなかったかもしれないが、縁戚になろうというくらいであるから、けっして悪いものではなかっただろう。その両者の関係に暗雲が立ち込めてくるのは、玉鬘が大君を冷泉院に参院させることと機を一にしている。玉鬘による大君の処遇が、夕霧側からの風当たりを厳しいものにしていくのであった。

内裏には、故大臣の心ざしおきたまへるさまことなりしを、かくひき違へたる御宮仕を、いかなるにかと思して、中将を召してなんのたまはせける。「御気色よろしからず。さればこそ、世人の心の中もかたぶきぬべきことなりとかねて申ししことを、思しとる方異にて、かう思したちにしかば、ともかくも聞こえがたくてはべるに、かかる仰せ言のはべれば、なにがしらが身のためもあぢきなくなんはべる」と、いとものしと思ひて、尚侍の君を申したまふ。「いさや。ただ今、かうにはかにしも思ひたたざりしを、あながちにいとほしうのたまはせしかば、後見なきまじらひの、内裏わたりは、はしたなげなめるを、今は心やすき御ありさまなめるにまかせきこえてと思ひよりしなり。誰も誰も、便なからむことは、ありのままにも諫めたまはで、今ひき返し、右大臣もひがひがしきやうにおもむけてのたまふなれば、苦しうなん。これもさるべきにこそは」とならかにのたまひて、心も騒がいたまはず。（竹河、九四～九五）

右は、玉鬘とその息子の中将の会話部分である。中将は、冷泉院の

もとに大君が嫁したことに端を発する家の閉塞状況について不満を述べる。それを受けた玉鬘の発話の中に、傍線部「今、ひき返し、右大臣も、ひがひがしきことのやうにおもむけてのたまふ」と夕霧についてふれている箇所がみられる。大君の参院決定後、夕霧が一転して冷淡な態度をとったことが明かされている。夕霧の玉鬘に対する態度が硬化していくさまがここから読み取れる。

そもそも、夕霧は単に溺愛する息子の恋情のみを問題にし、蔵人少将と大君の結婚を実現させようとしたのではないのではないか。政治的な判断が夕霧の頭にはあったとみられる。匂兵部卿巻で夕霧は、匂宮や薫を婿として迎えることを考えるが、「さすがにゆかしげなき仲らひ」（匂兵部卿、三一）と、二人が自身の甥、異母弟という近親すぎる間柄であることにいくばくかの躊躇を見せている。ここには新たなる政治的結びつきを得ようという夕霧の目論見があったことがしのばれる。そうした政治的な側面をも含め、鬚黒・玉鬘家は候補として選びとられたのではないか。

しかし、それもうまくいかないとなれば、必然的に対立の様相は深まっていく。その結果として、両者のその後が落差をもって示されることになる。

左大臣亡せたまひて、右は左に、藤大納言、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ。次々の人々なり上がりて、この薫中将は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこびしたまへる人々、この御族より外に人なきころほひになんありける。（竹河、一〇七）

夕霧をはじめとする六条院一族は、紅梅大納言一族とともに、繁栄を極めていく。このたびの栄達は二つの家のみが与った幸いだったという。そこには玉鬘一家は入ってはいない。玉鬘一家の子息たちの昇進状況は巻末にあらわれる。

左の大殿の宰相中将、大饗のまたの日、夕つけてここに参りたまへり。御息所里におはすと思ふにいとど心げさうそひて、「おほやけの数まへたまふよろこびなどは、何ともおぼえはべらず、私の思ふことかなはぬ嘆きのみ、年月にそへて思ひたまへはるけん方なきこと」と涙おし拭ふもことさらめいたり。二十七八のほどの、いと盛りににほひ、はなやかなる容貌したまへり。「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおごりて。官位をば何とも思はず過ぐしいますがらふや。故殿おはせましかば、ここなる人々も、かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし」とうち泣きたまふ。右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭中将と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり。宰相は、とかくつきづきしく。

（竹河、一一二～一一三）

官位昇進など二の次の蔵人少将の様子とともに、自身の息子たちの官位が進まないことを嘆く玉鬘が描かれる。巻末において、玉鬘家と他家の子どもたちとの間に生じた落差がはっきりと示され、竹河巻は閉じられていく。玉鬘家は、六条院家、紅梅大納言家に比して、不遇を託つことになり、苦しい状況を迎えた玉鬘の嘆きは深い。そして、この場面を最後に玉鬘は物語から退場し、以降は姿をあらわさない。

それぞれの家の将来を象徴するような昇進記事はいったいどのような意味を有しているのであろうか。[13] 重要なポイントは、六条院家のみならず紅梅大納言家の栄達も語られているということであろう。単に夕霧の一族のみが昇進を遂げたのではない。当代において、夕霧が政治的に優位な位置につけていることは確かであろうが、それとてこの時点においては、まだ盤石なものとは言えないだろう。物語は、光源氏の死後、多頭政治の様相を呈している。政治的な側面において、夕霧がその位置をより強固なものにしようとするとき、他家との関係は

重要になる。そのような折、故鬚黒の遺志を尊重し、夕霧らの申し出を拒否した玉鬘やその一族に対する風当たりは強くならざるをえない。巻末に示された昇進問題における明暗は、もはや義理の姉という位置づけからは程遠いところで夕霧が玉鬘をとらえ始めたことに由来するものではないだろうか。紅梅大納言家には政治面の将来的な可能性が大いに残されていることは、同時に玉鬘一家のみがこぼれおちたことを示している。六条院家と玉鬘家の競争や比較の問題ではなく、玉鬘家が夕霧によって切り捨てられたことが明らかにされているのだ。つまり、単に玉鬘家が没落していくことや、その結果としての昇進問題の明暗ということではなく、六条院家からの玉鬘一家の排除がここでは暗に示されているのである。ここに至って、明瞭に玉鬘一家が六条院家とは類縁関係では結ばれえなくなったことがはっきりするのである。そして、そのことは同時に、光源氏の遺志としてあった玉鬘厚遇が無視されることになったことをも意味する。

六、結語 ――「ひが事」の意味――

ここまで、竹河巻頭の序文の解釈と合わせて竹河巻の中で語られる玉鬘家の没落と夕霧の対応について見てきた。竹河巻の序文の中に見られる「離れたまへりし」という表現は、血縁関係を重視してとらえるべきものというよりも、疎隔あるいは乖離というように親疎関係の問題としてとらえるべきものだと考えられる。そうした見解に立つならば、次に問題になるのは、玉鬘家はいつ六条院家と疎遠になったのかということだ。そしてそれは、まさに竹河巻の内部で進行していくものであったとみられる。具体的には、夕霧の玉鬘方への対応が変化していく中に、両者の類縁関係の破綻が浮かび上がってくる。それは、光源氏の遺志に沿おうとするあり方にはじまり、そこから徐々に逸脱していくものであった。匂兵部卿巻や竹河巻の前半でみられた、光源氏の遺志を尊重し、玉鬘を厚遇しようとする夕霧の姿は、竹河巻末に向かうにしたがい見られなくなる。そして、最終的に玉鬘一家は夕霧によって切り捨てられ、没落へと向かうことになったのであった。六条院家と玉鬘家の関係崩壊こそが、竹河巻において悪御達によって語られた物語であったともいえよう。

そうしたことをふまえて、あらためて竹河巻頭の序文についてふれておく。竹河の序文を時間の流れにそった形で置き換えるならば、最後尾に配されることになる。その直前には、巻末部分が置かれることになる。巻末部分では、鬚黒・玉鬘一家の子どもたちの栄達が芳しくないこと、また気ままな暮らしを送る六条院家の若者たちの様子、それにつけても悔しさをこらえきれず涙をこぼす玉鬘の姿が描かれていた。竹河巻がこのように語り終えられていることをふまえつつ、巻冒頭の序文に立ち戻ってその内容を読み返すとき、この冒頭文の有している意味もより明確になるだろう。夕霧による玉鬘家の切り捨てというかたちでの巻の閉じ方は、「源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたり」という表現と密接な関係を持っている。また、悪御達が「落ちとまり残れる」とされるのも、主家の没落の端緒が示されていればこその表現である。

悪御達の語りは、光源氏亡き後、その不在を追懐しつつも、実際のところは玉鬘方の視線によって明るみにされる六条院家の享楽的な暮らしぶりや、光源氏の遺言としての玉鬘厚遇を果たさぬ夕霧の姿を露わに映し出している。このことは、光源氏を尊重しようとした夕霧をして光源氏の遺志が今や効力を持たないことをも明確に示してしまっている。匂兵部卿巻に見られた夕霧の光源氏尊重の念とそのありようは、竹河巻において真相をあぶりだされてしまったということになるだろう。そして、そうした事柄をより明瞭に示す役割が序文にあったのだとみられる。すなわち、「ひが事」という一語である。「紫のゆかり」の語りにみられる匂兵部卿巻の夕霧は、光源氏の遺志を引き継ぎ、

縁故者を後見・庇護したとされていたが、実際のところは玉鬘の切り捨てを行い、光源氏の遺志に背いている、ということを述べるのが悪御達の主目的だったのではないかと考える。つまり、夕霧らへの批判であり、光源氏尊重の念がどれほどのものであったのかということを明らかにする、いわば異議申し立て・疑義を中心とするものであったのだろう。そして、このことは、光源氏の遺志が形骸化し、その影響力の永遠性の否定、終焉までも語っているのだとみられる。

注

（1）武田宗俊によって作者別人説が説かれるなど、表現、内容をはじめとした多くの点で問題をはらむ巻として認識されてきた。こうした研究史については、池田一臣「匂宮・紅梅・竹河三帖の成立」（『講座　源氏物語の世界』七・有斐閣・昭和五七年）や、竹河巻研究史を概括した星山健「「竹河」巻論序説――語り手「悪御達」による物語取りとその意図」（『新物語研究』四、若草書房・平成八年）などに詳しい。

（2）『源氏物語』本文の引用は、小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』五に拠る。

（3）この表現について、用例的に見れば、現在この箇所において一般的に把握されている「紫の上付き女房」と解することは一概には認められないことは確かだが、本稿では、ひとまず文脈上から右のような解釈、すなわち「紫の上付きの女房」として押さえておく。

（4）『花鳥余情』本文の引用は、中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊』第二巻（武蔵野書院・昭和五三年）に拠る。

（5）『細流抄』本文の引用は、伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』（『源氏物語古注集成』第七巻・昭和五五年）に拠る。

（6）神野藤昭夫「竹河巻冒頭の解釈史・逍遥」（『源氏物語とその周辺』勉誠社・平成八年）を参照。

（7）森一郎「源氏物語の構想の方法――匂宮・紅梅・竹河の三帖をめぐって――」（『源氏物語の方法』桜楓社・昭和四四年）

（8）森氏は「御法巻は紫上の死を描くのである。源氏物語でも普通なら玉鬘の見舞いが必要なのではないか。当時の読者も普通のこととして見過ごしえなかったことなのではないか。当時の読者はきっとあるものを感じていたであろう。その答を作者はこの竹河巻頭に明かす。すなわち、紫上重病、死にのぞむところ、鬚黒家は源氏と疎遠になっていたのだ。故に玉鬘の見舞いがなかったのである。当時不審に思った読者は今ここで不審を晴らす」（前掲注（7）論文参照）と述べる

（9）前掲注（6）論文参照。

（10）拙稿「匂宮三帖の対立構造と終焉に向かう相互補完――光源氏像の位相差を中心に――」（『学術研究』五五・早稲田大学教育学部・平成十九年）

（11）星山健「「竹河」巻論――「信用できない語り手」による「紫のゆかり」引用と作者の意図――」（『岐阜工業高等専門学校紀要』三四・平成九年）

（12）「ひが事」については、齋藤弘康「「竹河」の語り手」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識　匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂・平成一六年）において、先行研究も含めてまとめられ、結局この語が判然としないことが確認される、としている。

（13）この昇進記事については、他巻と対照させるとき矛盾をきたすことが指摘されているが、それが作者の錯誤か否かはひとまずおき、竹河巻において語られる内容に対して何らかの意味、働きを有するものである可能性について検討しておく。

〈付記〉本稿は、二〇〇五年一二月三日、早稲田大学国文学会で行った口頭発表を基に作成したものである。席上、ご教示を賜った諸氏に記して感謝を申し上げる。